

■「在日」・移民・難民の波動は、このクニの国民と国家を根底から揺るがすか？ ファシスト・レイシスト共のさらなる管理と支配、包摂と排除に甘んじるほかないのか？ 南北融和の希望に「在日」の夢と願いは……語り尽くせない不安と葛藤の中から、あえて〈新時代〉を模索する。

【座談会】

「在日」の新時代

【参加者（発言順）】

- 趙 博（本誌編集委員）
- 朴 苑 眞（大学院生）
- 金村詩恩（ライター）
- 姜 信 子（作家）
- 金 時 鐘（詩人）



「在日」を生きている中で

趙博（司会、以下、趙） 朝鮮半島情勢は、去年から南北の対話と緊張緩和が急速に進んでいます。日本の政治状況は最悪と言ってよいでしょう。ヘイトスピーチ・クライムは相変わらず続いているし、安倍政権の外交手法については無能以外の言葉が思いつきません。そして「在日」の全体状況も把握しにくいままで、昔は「在日六〇万」という一般的了解がありました。今は「帰化」した人、国際結婚や事業その他の事由で韓国をはじめ「海外」から来た人々も視野に入れるならば、「在日」の実態がかつてのイメージからは激変しています。今日は、金時鐘先生が九〇歳、私は六〇代、姜信子さんは五〇代、他のお二人が二〇代、という「世代間」対話してみようという企みです。まず、自己紹介をお願いします。

朴苑眞（以下、朴） 韓国の京畿道東豆川で生まれて、五歳のときに家族と日本に渡ってきました。父が韓国人で母が日本人です。日本の公立の小学校に通って、中学・高校はコリア国際学園（KIS）に一期生として入学して学びました。大学の専攻は中国語で、現在は大学院生です。私が持ち続けている人生の課題は、どんな文化的背景を持つ子どもたちも引け目を感じることなく自分らしく生きる環境を

整えたい、そのための貢献がしたい……です。
金村詩恩（以下、金村） ライターをしています。私の父方が済州島、母方が忠清南道からきたそうです。一九九一年生まれ、私で三世になります。小学校から大学までは日本の学校に通いました。元は韓国籍だったのですが、小学校一年生のときから警察官になりたくて、そこで家族全員で日本の国籍を取ったわけです。私が住む埼玉県の蕨にはクルドの人がたくさん住んでいて、時間を見つけて学習支援をしたりしています。朴さんから話がありましたが、自分たちの属性を越えて切実な問題について出し合い、語り合うことが大切だと思います。

趙 大阪の西成区で一九五六年に生まれ、もうすぐ六三です。修士課程を終えて大学で非常勤講師をやっていたのですが、それだけでは食えないので予備校の講師も兼業しました。大学の方は馬鹿馬鹿しくなって八年目で辞めました。予備校講師は二〇年続けました。これも嫌になって、四八歳で教師稼業から足を洗いました。今は歌ったり、演じたり、モノを書いたりしています。

姜信子（以下、姜） 私は二〇代半ばから文章を書いて生きてきたんですけど、人生の大半は文章を書いてきて、その八割方のテーマというのは自分の居場所を探す、民族とか国家から逃げ回る。ざっくりいうと、そういうことですね。あとで詳しく話しますが。

趙 金時鐘先生には、失礼を重ね承知で、今回ご参加をいただきました……。

金時鐘(以下、金) 少し話からずれるかもしれないが、僕は「在日」を生きた」と言い出した人間だけど、「在日」を生きたと見えないことが見えてくる。「在日」という僕の考え方からすれば、日本人だって「在日」なんだね。つまり、日本という国家をずっと占領してきた日本人という人々は、自分が拠って来たことについて全くの白紙状態で知ろうとはしない。そういう意味では「在日日本人」なんです。「在日」というのは私たちだけの冠詞ではなくてね、日本に住む人は皆「在日」を冠していると言わなければならないと思います。

歴史の連続性を問うこと

趙 今号の特集は「在日」の新時代ですが、何も新時代が来たという意味ではありません。新時代が来てほしいなあ、という願望が根本にあるのですが、まず二〇代の若い方の考え、今の「在日」の状況をどう考えるか、などを話していただけますか。

朴 この何十年間に外国人が増えて多文化社会がやって来た、というような表現があるんですが、疑問を感じます。在日コリアンに限らず、華僑・華人やその他の民族も日本

社会の中で共生してきた歴史と現状をあえて見ようとせず、今になって多文化社会が外部からやってきたかのような表現は、やや違和感を覚えます。それは、日本もずっと多文化の状況で今に至っていると考えるからです。今後増える外国人の子どもたちが、日本で本当に自分らしく生きられるような環境を作りあげることができないか、そのことを日々思っています。

金村 今だからこそ、「在日」を語らなければいけないと思います。先日、日本の移民に関する本を読んでいたのですが、「在日」に関する記述がほとんどなかったんですね。移民を支援する側ですら、私たち「在日」と移民を区分けしているせいも、「在日」の歴史を共有している人がとても少ないんです。しかし、「在日」も移民も同じ制度の下に生きているわけじゃないですか。埼玉県にはトルコから逃れてきたクルド人たちがいて、彼らと付き合っていると「在日」と似た状況であることが分かってくるんです。そういうなかで、「在日」が何十年も培ってきたノウハウをいま存在している移民たちの生活にどう生かしていくのが重要になってきていると思います。

姜 移民のことで言えば、まず、「在日」は特別永住権者です。歴史的背景があつての「特別永住」なんだけど、それによってまずは、「在日」と、「在日」以外のさまざまな移民・難民・労働者が、政治的かつ制度的に決定的に区分けされている。この問いが根底にはあるのだということです。

金 質的に同じ問題、背中合わせで一緒のことだけどね、日本は先進国で一番遅れて国際人権規約を批准しています。一九七九年に国際人権規約を日本政府は受け入れ、国会で批准します。国際人権規約はA規約とB規約に分かれています。でも、違反事項を通告するB規約は今もって批准していません。B規約では不当に扱われることを提訴する権利が保障されている。国際人権規約は内外人平等の原理をうたった国際条約ですよ。だから、日本に住む人は日本人も台湾人も朝鮮人も全く一緒なんです。B規約では、ずっと持ち越している、居住権に付随する選挙権も、もちろん提訴権も保障されている。B規約の内容を保障すると、そのほとんどの行使先が在日朝鮮人の権利なんです。基本的に私たち「在日」に関しては、市民的権益の一番大事な部分が、今でも無権利状態のままなんだ。

「在日」のことが知られていない

趙 金村さんは「在日」と移民が切れているという現状に、歴史的総括の断絶を感じておられるわけですが、それは日本の人権状況を射抜く視座に思えます。朴さんは、その点に関してどういうご意見でしょうか。

朴 私がコリア国際学園を卒業したからでしょうか、もっ

される。「在日」自体も、韓国籍と朝鮮籍の間での政治的制度的分断があるわけで、これもまた到底ひとくくりには語れない。一方、「在日」・移民・難民は、大きく言えば、歴史的には植民地主義を、まさに現在の問題としてはグローバル資本主義といったものをその背景として共有しているわけですよ。そのところを、個別の、つながりのない問題であるかのように断ち切っていく、互いに互いの存在を不可視のものにしてゆく、そういう状況に私たちは投げ込まれているんですね。たまたま詩恩君は、クルド人に関わり、移民が置かれている現実の一端に触れ、「在日」の側から彼らにアクセスしていく回路を自分の中で開いているわけだけでも、それもまた「在日」の中では少数者であるという厳しい認識は必要だと思います。私たちは、政治的経済的権力を握る者による制度的分断によって、他者に対する想像力すら分断されている。下手すると権力を持つ者と同じ目線で、自分と似たような他者を扱いかねない。詩恩君が投げかけた問題を考える際には、そういう危ういところに追い込まれているのが私たちなのだという認識を大前提として持っていたいと思うんです。それは、言い換えれば、条件反射のように「国家」とか「民族」という大きな言葉で他者をくくって、国家とか民族とかからはみ出すアイデンティティに当然のように悩むような、われらの骨の髄まで染みこんだ「近代」からいかに脱出するか、と



◆金村詩恩(左)と朴苑眞

全然知りません。今は大学院に在籍していますが、大学生の時代に中国帰国者や在日コリアンの話をしたりしても、周囲の皆さんは、まず知らなかったですね。

私は、自分で引け目を感じることなく生きてこれました。それは、周りの方々が私の文化的背景を自然に受け入れてくれる環境があったからです。今後、もっと増える「非日本人」の子どもたちのために、私は在日コリアンの問題も含めて伝えていきたいなと思います。私が学んだ分を伝えたいなと思います。

趙 コリア国際学園でのさまざまな経験や出会いは、朴さんにとって大きく影響していますか。

朴 ええ。私が初めて在日コリアンと呼ばれる人々に出会

と日本の友達にも「在日」を知ってほしい、伝えたい、という気持ちが強くなります。私は自分が育った環境に感謝している部分がたくさんあるので、もっと本当に身近にたくさん在日コリアンの方がいらっしやるということを、知ってほしい。皆さん、知っているようにで

ったのが中学一年生のときでした。日本の公立の小学校に通っていたので、周りは日本人の学生で、私も日本人の学生のように小学校では成長してきたんですけど、コリア国際学園に入ってから、本当にいろいろなパターンの在日コリアン、韓国人留学生、日本人……さまざまな人々と友達になりました。私は、幼いころから自分が韓国で生まれ育ったことを知っていました。私も日本に住むコリアンだけど、ここにいる友達はバックグラウンドがちよっと異なるコリアンだなあと。でもそこで、特に彼らと線引きをしたわけでもなく、同じコリアンであることに中学一年生の頃はただ嬉しかったことを覚えています。非常に印象深く残っているのが、私のクラスにいた友達の人と私が祖父の故郷まで覚えていたことでした。中には住所まで覚えている友達もいてびっくりしました。私は両親の故郷は知っていても、祖父母や親戚の故郷までは知らなかったからです。ルーツを大事にすること、祖父母の歴史を自分たちの歴史と捉えているという点は、「在日」の彼らから学んだ気がします。友達の中には韓国人であることはあまり周りには言いたくないと思う生徒もいれば、ずっと朝鮮学校に通ってきた生徒、建国（白頭学院、金剛学園に通ってきた生徒もいました。自分のルーツを全然考えずに生きてきた友達もいれば、深く考えてきた友達もいました。本当に多様だったと思います。

高校二年生のときに、あるボランティアに参加することになって、在日コリアン以外のコリアンについて考える機会がありました。それは、コリアにルーツを持つ、日本・中国・ロシア・韓国の子どもの交流キャンプでした。またそこで、「ああ、ロシアにも中国にもすごく深い歴史の根があるんだ」ということを知りました。コリアと同じルーツがあつて、それぞれ繋がりがつつも異なる歴史のなかで生きてきた子どもたちと触れあつて、いろいろ考えることができました。ロシアの高麗人（コリョサラム）と呼ばれる人たちと、手をつないで白頭山に登ったんですよ。大学で中国語を専攻したのも、もともと言語が好きだったこともありますが、中国朝鮮族の人々との出会いが大きく影響しています。

ロシアのウスリースクには高麗人文化センターがあるんですが、ロシア語があまり話せない子どもたちが多いんですね。そこで、ロシア語も勉強したいなと思い、第二言語はロシア語を勉強しました。私は韓国で生まれ日本でずっと成長してきましたけど、KISという学校と出会って、たくさんの「在日」の人に出会い、世界中のコリアンにも出会い、また、私自身についてもよく考えることのできた学生生活だったと思います。

金村 同じマイノリティ性を持つ人たちと出会うことも大切だと思いますが、それが、同時に自分の「在日性」を強

化することになってはいけないと思います。卒業論文を書いていたとき、友人たちが中間発表会を開いてくれたことがありました。発表自体は上手くいって終わったあと、参加者でお酒を飲みながら喋っていると、ある女性が「なにをしているの?」と言いながらわたしたちのほうへ来たんです。上手くいったせいもあつて、発表会の内容を得意げに話したら、彼女が「私の父は被差別部落の出身で、近くに住んでいた在日の人たちと戦うためにヤクザになりました。こんな私は生きていいんでしょうか」と言ってきました。それを聴いて、「対立していたかもしれない関係の人にも違う切実さがあつたんだ……」と衝撃を受けました。発表で使ったレジュメを読んでもみると「私は在日です」以上のことを言っていないことに気づきました。それから「対立しているかもしれないけれど違う切実さを持っている人たちとどうやって語りあえるか」を考えるようになりました。それで「書くこと」を始めたわけですが、私にとって「在日である」とは、違う切実さを持つ人たちと出会う切符みたいなものなんです。

姜 まあ、「在日」であることというのは、それぞれの「在日」が、その意味を、それぞれの人生で肉付けしていくほかなんじやないでしょうか。それは私にとっては、「近代」というものの本質への気づきをもたらした「出自」でもあるし、「近代」と深く結びついたナショナリズム・民